

## 第6回 フォーラム報告書

平成21年1月8日

### 開 会

[廣 田] おはようございます。まだおいでになっていない方もいらっしゃると思いますが、時間になりましたので始めさせていただきます。本日は「進歩主義の後継ぎはなにか」の第6回ですが、ご出席いただき、ありがとうございます。新年早々のお忙しいところ恐縮しております。

過去のこのフォーラムのやり方は先生方もご承知だと思いますが、ただお話を伺ってそれでおしまいとなってしまいますと、せっかくいいお話を伺って、いいディスカッションをしていたいただいても雲散霧消するようなことになりかねませんので、このフォーラムでは一貫してご講演だけではなく、討論もできるだけ忠実に再現して印刷、記録するというをやってまいりました。今回もそういうことでお願いしたいと思います。

ご講演のほうは問題ないのですが、非常に活発なディスカッションが起こりますと、どなたが発言されたか、どなたがコメントされたかわからなくなることがありますので、話の流れを断ち切ることになったら本末転倒ですが、できるだけご発言の前にちょっとお名前を入れていただくと、あとでテープ起こしをするときに大変ありがたいと思いますので、お気づきになりましたらお願いしたいと思います。会が終わりましたあと、しつこく校正をお願いいたしますので、お忙しいところさらにお願ひすることになって恐縮ですが、どうぞよろしくお願ひいたします。

それでは最初に、先生方はお互いによくご存じの方が多いかと思いますが、自己紹介をしていただけると大変ありがたいと思います。プログラムに書いてありますように、25分ありますので、数分以内でざっとお願いしたいと思います。ついでながら私もやらさせていただきますと、総研大に創設以来参加させていただいております。最初は長倉学長の下で副学長を数年務めまして、大学がこのキャンパスを確保できて、1995年2月にここに移りましたが、4月から6年間学長を務めさせていただいております。そのあとは悠々ではないのですが、あっぶあっぶしながら自適だけはしております。どうぞよろしくお願ひします。専門は分子科学です。それでは高畑さんからお願いします。

[高 畑] この4月から学長を拝命しているのですが、大先輩もおられますので、学長は何だということはあまり申し上げませんが、私は専門で進化生物学をやっております。お隣の井村

先生が進化医学の本をだいぶ前に出してしまして、井村先生の場合は医学がご専門で進化学に興味を持たれて、二つの融合分野を考えられたということですが、私は進化のほうから医学のほうへ出向いてドッキングしたいと思っています。

私は学長の仕事のほかに、少しはそういうこともやってみたいと思っているところですが、なかなか難しい機構の問題もありますので、どうなるかわかりませんが、よろしく願いいたします。

[井 村] 私は内科の医者で、神戸大学と京都大学でおよそ20年、内科の教授を務めました。ところが日本の大学はわりとひどいところでありまして、学長を突然命ぜられました。アメリカでは学長になることを、魂の暗夜であると言うそうですが、6年間、暗夜を彷徨いたしました。

やっとこれで終わったと思ったら、もっとひどいところに放り込まれて、さらに6年近く科学技術会議及び総合科学技術会議で科学技術政策のことをやりました。そのころに廣田先生にお世話になっておりますので、ここへ来いと言われると来ざるをえないということで今日は伺った次第です。

私が学長になったころは就任と同時に研究費をすべて取り上げられてしまいました。したがって研究はまったくできなくなるという状況になってしまったわけですが、その中で少し寂しいものですから、病気というものを進化の立場から見ようということで、少しずつ論文を読んだりして、簡単な本を1冊出しました。最近もう1冊出版したのですが、今日は人類進化という立場から進歩主義について私の考えを述べてみたいと思っています。どうぞよろしくお願い致します。

[堀 田] 情報システム研究機構の機構長をしています堀田です。私が一番困るのは、専門は何ですかという質問で、最初は医者でしたが、医学部を出て、なかなか臨床医になる気がなくて、もう少しサイエンスをやりたいと思って基礎医学へ行きました。そうしたら基礎医学のほうも決してそう新しいわけではなく、遺伝子とか脳といったことが次の時代であると思い、遺伝子を使って脳の研究をするという志でアメリカに行きました。アメリカに4年いましたが、ショウジョウバエの研究をしまして、研究らしい研究としてはその側面がございます。

終わったあとに日本に帰ろうとしたら、医学部でハエの脳の研究など誰が雇うかと言われて、どこにも雇ってもらえなかったのが、理学部の物理学教室に落ち着き、生物物理と称してハエを飛ばしてハエトロンとか何とか言って、物理の先生をごまかして25年間過ごしました。おかげさまで物理の学生をだいぶ生物のほうへ転向させられたことはよかったと思っています。そ

う思っていたら、遺伝学研究所へ来いと言われて、遺伝研に行って、やれやれと思っていたら法人化にぶつかって、研究所を束ねるという作業でガヤガヤ言っていたら、情報システム研究機構ということで現在やっています。

遺伝研の所長時代から考えると長いので、サイエンスのことは忘れかけてしまっていますが、今日は進歩主義の後継と言われても、僕としては何を言っているか全然わかりません。正直に言うと、われわれは必死で進歩させてきたので、終わったら退場ではないかと思いますが、いまどうなっているかということをも生物学を中心として話をしたいと思います。

総研大は遺伝学専攻の時代にいろいろお世話になったこともあり、廣田先生にもお世話になりましたので、呼ばれたら来ざるをえないということでまいりました。よろしくお願いします。

[戒 能] 私はいま早稲田大学におまして、特にロースクールという大変な、要するに弁護士さん、裁判官、検察官、いわゆる法曹を目指す学生がいるところにおります。マスターレベルですが、新しく日本にできたシステムで、その中でやっています。その前は名古屋大学に長くおまして、専門はいわゆる英米法ですが、英米法というのは存在しないので、私はコモンローを勉強していると言っています。

早稲田大学には比較法研究所というのがあり、その所長を最近までやっていました。中小企業のようなところで、所長が何でもやらなければいけないということで、大変忙しくやっていました。今日は懐かしい先生方にお目にかかれて非常に嬉しく思っています。実は日本学術会議の副会長をさせていただきました。私がやっていたときの日本学術会議は、黒川清先生という方が会長でした。

その前の会長は吉川先生で、お二人の会長にお仕えたのですが、この時代が非常に大変な時代で、学術会議はいつも存亡の危機ですが、このときは本当に存亡の危機で、独法でいいのではないかという話もいろいろありました。黒川先生、岸先生といった方々と一緒に、何とか学術会議を持続させなければいけないということで大変な時代でしたが、いまから思えば非常に懐かしく思います。

そのときに廣田先生とか鴨下先生、御園生先生、柴田先生等々にお目にかかって、いろいろな意味で大変なためになりました。比較法という狭い分野でやっていますが、進歩のあとは何かかという、堀田先生が言われたように私もまったくわからないのですが、何か言えそうだという気がするの、たぶん学術会議にいたおかげだと思っています。

学術会議が終わってから、いわゆる連携会員というのをやっています。そして、アジアにおける社会科学系の連合学会で、「アジア社会科学研究協議会連盟」(Association of Asian Social

Science Research Council: AASSREC) という長い名前の国際組織の隔年総会の開催の順番が日本に回ってきて、学術会議の人文社会系の副会長であったため運悪く私が開催国としての会長職をやらざるをえないということで、居残りみたいになって連携会員をやって、一昨年、AASSRECと言いますが、国際会議を主催しました。これも実に変で、学術会議は国際会議を開くお金がまったくないということもあって、お金集めから何から全部やらなければいけないという大変な学会でした。ただ名古屋大時代の友人や伊藤達雄先生などの「同窓」の会員の方々の助けもあって大変成功した会議を名古屋大学で、2007年9月27-30日にわたって開催し、最近この成果を出版できる運びになりました（伊藤達雄・戒能通厚編『アジアの経済発展と環境問題—社会科学からの展望』、2009年3月、明石書店）。

こういうことも含めて、学術会議を離れてもいろいろなことをやっています。どうぞよろしくお願いいたします。

[柴 田] この会に来たのは初めてで、事情もよくわからないままここに座っています。私はここにいらっしゃる方の中でも残念なことに最年長世代に属するようになったようです。戦争が終わったときが10歳で、ひどい時代でした。文科系のことをやっては絶対に食えないという時代だったので、技術屋になればどんな体制になっても食えるだろうと思って理科に行きました。そのうち世の中も多少よくなってきて、文学をやっていても飢え死にはしなくて済みそうだという感じで、本来は工学部に行くはずだったのですが、文学部になりました。

専門はドイツ文学です。非常にいい加減な話で、いまの学生たちには聞かせられないのですが、理系でドイツ語をやっていて、しかも理系から行ける欠員のあるところは文学系ではドイツ文学だけだったので、文学をやれるのならどこでもいいと思ってドイツ文学に行きました。ただ、そのとき多少理屈を立てなければいけません。ドイツはヨーロッパ圏内の後進国です。日本はそのときに、三等国と言われていて、これから近代化をやる。つまり後進国における近代化は一体どういうことなのかということに興味を持って、だからドイツ文学をやる。そういう理屈を立てました。その背後には、少年の私が経験した軍国主義の日本、特に当時の国民学校（今の小学校）での軍国主義教育への嫌悪があったと思います。一口に言えば、暴力を伴う非合理主義と個人の理性と自由の圧殺です。しかも、敗戦によって一度は否定されながら、数年も経つと、またそれが、日本社会の底流として力を振り始めていた。後進国における近代化はいかにして可能か、が個人的テーマでした。

そういう訳で18世紀から19世紀にかけてドイツが18世紀末のフランス革命やその後の戦争を経て、近世社会から近代社会に変わるときのドイツ文学を自分のテーマにしました。当時、20

世紀初頭の、トーマス・マンやリルケつまり近代を経験してきた作家たちが当時のドイツ文学研究の中心でしたが、「近代の虚妄」とか、あるいは「現実の崩壊」とか言われても、敗戦少年の自分にはまったく実感が無い。

そういう議論は、焼け跡の中からようやく普通の生活ができるようになった日本では、ただヨーロッパのまねをしているだけじゃないか、という気がして、近世社会から近代社会に変わるところでいったいどういうことが人間の心に起きるのかということに専門にしました。

ところがその時代のいろいろな作家を拾い読み、流し読みして10年くらい経つと、その時代の中心的な作家であったゲーテがたいへんおもしろい。しかも、文学史に書かれているのとはむしろ正反対の意味でおもしろいと思うようになりました。ほかの人たちもおもしろいのですが、ゲーテのおもしろさは桁が違うあるいは質が違うという気がして、そのあとゲーテが仕事の中心になりました。

ゲーテは1749年に生まれて、1832年に死んでいます。つまり彼は近世から近代に変わる冒頭、フランス革命とその後のヨーロッパの動乱の全過程を隣の後進国ドイツで全部経験していて、近代が始まる以前に、近代のものの考え方に非常に深い疑問を持った人だ、そこが同時代のシラーなどとまったく違うと私には見えたのです。

ゲーテは、ドイツ本国においても日本においても大変誤解されている人で、近代人ゲーテ、あるいは『ヴィルヘルム・マイスター』における人間の教養の完成とか、19世紀後半のドイツ市民社会のタームズでもっぱら語られています、それでは決してとらえられない人で、そういう近代そのものを根源的におかしいと思っていた人だと、私は思っています。

それで仕事はゲーテが中心になって60歳の東大定年までやっていて、そのあと共立女子大に10年間いました。東大を定年後、10年間私立女子大でのんびり過ごすなどというのは、いまの世の中では考えられないことですが、私はそういう幸せな過程を経た最後の人間です。そこでは仕事を少し広げて、小説や詩、戯曲、あるいは思想的エッセイを読むことの楽しさ、おもしろさ、大事さを、将来ごく普通の生活をしていくであろう人たち（つまり研究者にはならない人たち）にわかってもらいたいということを考えていました。

いまは念願の年金生活に入って、名刺も持たずに皆様に失礼しております。よろしく願いいたします。

[片 倉] この会は一昨々年でしたか、まだ国際日本文化研究センターの所長を務めさせてもらっているときにお呼びいただいて、仕事としてここに来ることができました。実は私はいくつか、講演しないで聞かせていただくという研究会が一番好きで、今日は本当にありが

たい機会です。

私自身は地理で理学博士という学位をもらったのですが、東大は主人が理学部に入っています。先ほど堀田先生がおっしゃいましたが、私も専門は何かと言われると困ってしまいます。専門というのは、知らないとか、わからないというところに頭を突っ込んでいくのが結果として専門になるのではないかと思います、そういうことでアメリカに留学したときに一番わからなかったのがイスラム世界の人々のことです。

それでイスラム世界に首を突っ込みだしたところ、ちょっと知りたいと思っただけでしたが、世界最古の文明の発祥地を含むようなところで、あと何年かすると世界の総人口の半分以上がイスラム教徒になると言う人もいて、そのままいまだにわからないこと、知らないことがあって続けているというものです。今日は皆様のお話を楽しみにさせていただいております。

[鴨 下] 私も今日はただでお話を聞かせていただくメンバーですが、これまで6回全部出席しているのは、おそらく廣田先生以外は私だけではないかと思います。そんなことで今日も夕方、外国出張が入っているのですが、無理をして午前中だけでもということで来ています。この前にお座りになっているスピーカーの先生方はひときわご高名な方が多いと思い、一部でも聞かせていただきたいと思ってまいりました。

柴田先生がお話になりましたが、柴田先生が東大で文学部長をなさったときに、私は医学部長でした。そのころの東大は悪いことの9割は医学部から起こって、そのまた9割は病院から起こるといって時代で、最低の悪い思い出がありますが、私も定年で自由にさせていただいています。

私は専門は小児科ですが、なぜか廣田先生の健康相談の相手をさせていただくといいご縁もあって、ずうずうしく出てきております。私も何度かお話しさせていただいていますが、確か去年、一人おいてお隣に座っていらしたのが小林誠先生で、ノーベル賞をお貰いになりました。ひょっとしてこの中から来年ノーベル賞をいただける方が出ればいいのではないかと思います。どうぞよろしく願いいたします。

[御園生] ずっと以前に1回この会に出させていただいて、その後、ご案内を廣田先生からいただきながら、なかなか出られなかったのですが、今回は中学高校で同級の堀田さんが話されるということで、はるばるやってまいりました。

私のバックグラウンドは工学部の応用化学科とあって、化学という点では廣田先生とは近いのですが、実学に近くかつ設計重視の工学です。われわれも自然科学をやっていて、だいたい理学を勉強してから工学に入ります。従って、工学の人は理学も工学もわかっているのに、

理学の人には工学のことをよくわかってもらっていないためか、議論するときにはやりにくいと思うことがありますが、本日は工学の立場で参加させていただいています。

いま勤めているところは製品評価技術基盤機構というところで、研究機関ではなく、役も理事長という役割ですが、ここは経済産業省の工兵隊のようなところで、製品安全とか化学物質の安全といった現場で、最近非常に忙しくドタバタしています。

私自身は社会の持続性に技術の立場から非常に興味を持っています。懸念しているのは、世間の持続性に関するリスクの理解があまり合理的ではない。そのあたりを正さないと、日本の科学・技術政策のあり方がおかしな方向に行ってしまうのではないかという懸念は持っています。そういう点に関して勉強させていただきたいと思っています。

[出 口] 国立民族学博物館の出口と申します。総研大の組織で言うと、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻というところに属しています。民博に行く前は、葉山の本部キャンパスで高畑先生、あるいは当時の廣田学長のもとで仕事をさせていただきました。そういう関係もあって、第3回のときに声を掛けていただいて、その後もずっとお声を掛けていただきながら法人化以降大変忙しくて、なかなか参加できずに今日に至りました。私のような者が末席を汚すのは大変失礼と思いますが、著名な先生方の警咳に触れるチャンスかと思っています。

私自身の専門はきわめてマイナーなところをやっていて、文科系です。文系の学者というのは政府とか企業とか大きなセクターを研究していたのですが、私は、その他つまり政府でもない、あるいは企業でもないセクターを対象としています。政府でもないというのは、ノンガバメンタル・オーガニゼーションズということで、略称で言うとNGOとなりますし、企業でもないというのは、ノンプロフィット・オーガニゼーションズということで、NPOとなります。その中でも研究の中心にしていたのはアメリカの財団です。

ほとんど研究者がいなかった分野ですが、日本の中で、中核的な非営利、非政府組織というのは、実は財団法人、社団法人になります。ご関係の深い先生も多々いらっしゃると思いますが、これが110年ぶりに、昨年12月1日に制度改革されて、内閣府に公益認定等委員会というのができました。これはイギリスのチャリティ・コミッションという、私の研究分野の一つでしたが、それをモデルにしていた関係があり、その委員もしています。

この委員は大変な激務で、現在、財団、社団が約2万5000あって、そのうち7000が国所管です。これが今後5年間にわたって新制度へ移行するというので、大学の法人化に続いて大制度改革の渦中の中に放り込まれているところです。よろしくお願ひします。

[廣 田] どうもありがとうございました。長倉先生も昨晚からお泊りですが、まだおみえにならなくて、先生はたぶん自己紹介には出なくてもいいと時間を計っておいでになるのではないかと思います。それからスピーカーで山折先生がおみえにならなくて、黒田さんはものすごく忙しいらしくて、どうもレスポンスが悪くて今日の出席も懸念しています。そういうお二人のご事情がありますので、後ほどいらしたら簡単に自己紹介をお願いすることにいたします。

それから本島先生はやはり大変お忙しいらしくて、しかしこういうチャンスだからぜひ来たいということで、懇親会から出席するというお返事をいただいています。本島さんとお話したい方は懇親会までぜひお残りいただきたいと思います。今晚はここに泊まっていただけるように聞いています。

それではさっそく最初の堀田先生のご講演をお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。